

熊手と提灯

正岡子規

青空文庫

本郷の金助町に何がしを訪うての帰り例の如く車をゆるゆると歩ませて 切通きりどおしの坂の

上に出た。それは夜の九時頃で、初冬の月が冴さえ渡つて居るから病人には寒く感ぜられる。

坂を下りながら向うを見ると遠くの屋根の上に真赤な塊かたまりが忽ち現れたのでちよつと驚いた。

箒ほうき星が三つ四つ一処に出たかと思うような形で怪しげな色であつた。今宵こよひは地球と箒

星とが衝突すると前からいうて居たその夜であつたから箒星とも見えたのであろうが、善

く見れば鬼灯ほおずき提灯おびただが夥しくかたまつて高くさしあげられて居るのだ。それが浅草の雷かみな

門りもん辺であるかと思うほど遠くに見える。今日は二の西にとりでしかも晴天であるから、昨年来

雨に降られた償いを今日一日に取りかえそうという大景氣で、その景氣づけに高く吊つつて

ある提灯だと分るとその赤い色が非常に愉快に見えて来た。

坂を下りて提灯が見えなくなると熊手持つて帰る人が頻しきりに目につくから、どんな奴が

熊手なんか買うか試こころみに人相を鑑定してやろうと思うて居ると、向うから馬鹿に大きな熊手

をさしあげて威張つて居る奴がやつて来た。職人であろうか、しかし善く分らぬ。月が後か

ら照して居るので顔ははっきり見えぬが何でも慾ばつて居るような人相だ。こんな奴には

きつと福は来ないよ。身分不相応な大熊手を買うて見た処で、いざ鎌倉という時に宝船の

中から鼠の糞は落ちようと金が湧いて出る氣遣はなしさ、まさか大仏の簪にもならぬものを屑屋だつて心よくは買うまい。……………やがて次の熊手が来た。今度は二人乗のよぼ車に窮屈そうに二人の婆さんが乗つて居る。勿論田舎の婆さんでその中の一人が誠に小さい一尺ばかりの熊手を持つて居る。もし前の熊手が一号という大きさならこの熊手は廿九号位であるであろう。その小さな奴を膝の上にも置かないでやはり上向けて大熊手持つたようにさしあげて居たのもおかしい。その無邪氣な間の抜けた顔は慥かに無慾という事を現して居るので、こいつには大に福を与えてやりたかった。自分が福の神であつたら今宵この婆さんの内に往て、そつとその枕もとへ小判の山を積んで置いてやるよ、あしたの朝起きて婆さんがどんなに驚くであろう。しかし善く考えると福相という相ではない。むしろ貧相の方であつて、六十年来持ち来つたつぎませの財布を孫娘の嫁入に譲つてやる方だ。して見ると福の神はこんな皺くちや婆さんを嫌うのであろうか。あるいは福の神はこの婆さんの内の門口まで行くのであるけれど、婆さんの方で、福なんかいらないうて追い返すような人相とも見える。……………次も二人乗の車だが今度は威勢が善い。乗つて居る者は、三十余りか四十にも近い位の、かつぶくの善い、堅帽を被つた男で、中位な熊手を持つて居る。大方かなりな商家の若旦那であらう。四十近くでは若旦那でもない訳だ

が、それは六十に余る達者な親父があつて、その親父がまた慾ばりきつたごうつくばりのえら者で、なかなか六十になつても七十になつても隠居なんかしないので、立派な一人前の後つぎを持ちながらまだ容易に財産を引き渡さぬ、それで仕方なしに今に若旦那で居るといふ人相をして居る、側そばに乗つて居るのは十二、三の少年でこれが末の弟に違ひない。こいつにも余り福をやりたくないのであるが、しかし大鷲大明神なかなか慾ばつて居るからこれくらいの熊手を買つてもうた義理に少しは掻かき込んでやるかもしれない。………

……仲町を左へ曲つて雪見橋へ出ると出あいがしらに、三十四、五の、丸まるまげ鬚まげに結うた、栗に目口鼻つけたような顔の、手頃の熊手を持つた、不斷著ふだんぎのままに下駄はいた、どこかの上かみさんが来た。くたびれた様も見えないで、下駄の齒をかつかつと鳴らしながら、さつさと歸つて行く。その人相を見るに、これは夫婦ぐらして豆屋を始めて居て夫婦とも非常な稼いぎ手ではあるが、上さんの方がかえつて愛あい嬌きようが少いので、上さんはいつも豆の熬いり役で、亭主の方が紙袋に盛り役を勤めて居る。もつともこの亭主は上さんよりも年は二つ三つ若くて、上さんよりも奇麗で、上さんよりもお世辞が善い。それで夫婦中は非常に善く調和して居るから不思議だ。今その上さんが熊手持つて忙しそうに歸つて行くのは内に居る子供が酉とりの市いちのお土産でも待つて居るのかとも見えるがそうではない。この夫婦に

は子は一人もないのでこの上さんは大きな三毛猫を一匹飼うて子よりも大事にして居る。しかし猫には夕飯まで喰わして出て来たのだからそれを気に掛けるでもないが、何しろ夫婦ぐらしで手の抜けぬ処を、例年の事だから今年もちよつとお参りをするというて出かけたのであるから、早く帰らねば内の商売が案じられるのである。ほんとうに辛抱の強い、稼ぎに身を入れる善い上さんだ。これにこそ福を与えて善かろう。もしこの上さんに福をやらなければ福をやるべき人間は外にあるはずはない。この上さんが毎晩五錢ずつを貯金箱に入れる事にきめて居るのだが、せめてそれを十錢ずつにしてやりたいよ。するとその貯金がたまつて後には金持に出世する。しかし大驚の意見と僕の意見と往々衝突するから保証は出来ない。

三橋に出ると驚いた。両側の店は檐のきのある限り提灯を吊つるして居る。二階三階の内は二階三階の檐も皆長提灯を透間すきまなく掛けて居る。それでまだ物足らぬと見えて屋根の上から三橋の欄干らんかんへ綱を引いてそれに鬼灯ほおずき提灯を掛けて居るのもある。どうも奇麗だ。何だか愉快でたまらん。車は「揚出し」の前を過ぎて進んで往た。「雁鍋」も「達磨汁粉」も家は提灯に隠れて居る。瓦斯燈ガスもあつて、電気燈もあつて、鉄道馬車の灯は赤と緑とがあつて、提灯は両側に千も万もあつて、その上から月が照つて居るといふ景色だ。実に奇麗で

実に愉快だ。自分はこの時五つか六つの子供に返りたいような心持がした。そして母に手を引かれて歩行^{ある}いて居る処でありたかった。そして両側の提灯に眼を奪われてあちこちと見廻して居るので度々石につまずいて転ぼうとするのを母に扶^{たす}けられるという事でありたかった。そして遂には何か買うてくれとねだりはじめて、とうとうねだりおおせてその辺の菓子屋へはいるという事でありたかった。車ははや山へ上りかけた。左には瓦斯の火で「鳥又」という字が出て居る。松源の奥には鼓^{つづみ}がぽんぽんと鳴って居る。何となくここを見捨てるのが残り惜いので車を返せとおうと思うたがそれも余り可笑^{おか}しいからいいかねて居ると車は一足二足と山へ上って行く。何か買物でもしようかと思うて、それで車返せとおうとしたが、ちよつと買うような物がない。車は一足二足とまた進む。いつそ山下から返れとおうと思うたがそれとも思うて躊躇^{ちゅうちよ}して居ると車は山を上つてしもうた。もう提灯も何も見えぬ。もう仕方がないとあきらめると、つめたい風が森の中から出て電氣燈の光にまじつて来るので、首巻を鼻までかけて見たが直に落ちてしまう、寒さは寒し、急に背中がぞくぞくして気分が悪くなつたからだうつむいたばかりで首もあげぬ。早く内へ帰れば善いとばかり思いつめて居る。車はズーズーズー往た。暗い森の間をズーズーズーズー過ぎた。何だか書生が都々逸^{どじいつ}を歌って居るのに出逢つたが、それもどこか知

らぬ。ズーズーズー行く中に余りひどい音がしたので、今まで熱にうかされてうとうとして居たような心持が破られた。首をあげて見ると新坂の踏切で汽車に逢うたのであった。それからまたズーズーズー行く中に急に明りがさしたから、見ると右側に一面にスリガラスを入れた家がある。内側には灯が明るくついて居るので鉢植の草が三鉢ほどスリガラスに影を写してあざやかに見える。一つは丸い小さい葉で、一つは万年青おもとのような広い長い葉で、今一つは蘭のような狭い長い葉が垂れて居る。ようよう床屋の前まで来たのであった。また曲った道をいくつも曲つて、とうとう内へ帰りついて蒲団の上へ這い上った。燈とうろを燃やして室は暖あためてある。湯婆たんぼも今取りかえたばかりだ。始めて生き返ったような心持になると直に提灯の光景が目の前に現れて来る。横になって暖まりながらいろいろ考すえて居たが、この家の檐から庭の樹から一面に毬きゅう燈を釣つて、その下へ団子屋や鮓屋すしや汁粉屋をこしらえて、そしてこの二、三間しかない狭い庭で園遊会を開いたら面白おもしろいだろうという事を考かんえついた。

〔自筆稿『ホトトギス』第三卷第三号 明治32・12・10〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二巻」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第三巻第三号」

1899（明治32）年12月10日

※底本では、表題の下に「子規」と記載されています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年8月1日作成

2011年5月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

熊手と提灯

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>